



ERICとの出合

比嘉良充

ERICとの最初の出合の瞬間から私は一瞬たりとも視線をそらすことができなかつた。その理由は、私のすべてがERICの出方ひとつにかかっていたからである。

通常、ERICは男性名であるが、私の出合ったERICは中性であった。ERICとはEducational Resources Information Centersの略称で、米国政府教育局の教育資源情報センターのオンライン・システムのことである。このオンライン・システムの末端には電話回線によって結ばれた最新のコンピューターにタイプライターキーボードのあるなかなかハンサムな電子計算機がある。米国教育局の教育資源情報センターは全米の教育機関、研究所から発表された研究論文、報告書等を選んで、年間約14,000点がERICコンピューターに収録されていると聞いている。なお、ERICは月毎に収録された資料の注釈付き目録を出版して全米の教育研究の成果を紹介している。これはERIC-RIE (Resources In Education) と呼ばれている。また、コンピューターに収録された各資料の要約部分は受け入れ番号順に並び、これに件名、著者名、研究所名索引が付いていて、これはERIC-CIJE (Current Index To Journals In Education) と呼ばれている。なお、ERICの教育関係の資料から特に高等教育や情報科学の分野の文献を選んでマイクロフィッシュ版で入手することもできる。ERICは全米における最近の教育学に関する研究成果を知る最も有効な手掛りとして多くの研究者達に利用されている。

以前から私はこのERICについてある程度の知識はもっていた。そして、機会があれば必ず利用してみたいと思っていた。その機会が私が南カリフォルニア大学大学院で博士論文の第二章、“Review Of The Literature”の著述に必要な資料収集を始めた時に訪れた。まず、大学附属コンピューターセンターのSearch technicianに会い、私の論文テーマと内容を説明して研究分野を明確に分類したあと、キーワード(key word, key terminology, key concept)を線密に検討して選んだ。さていよいよERICとのご対面。期待と緊張感が張り詰めるなかにコンピューターのスイッチが入られ、タイプライターを打つ要領で、キーワードが打ち込まれた。すると、2、3秒も待たずに、あのコンピ

ユーザー特有の青い文字が次から次へと単語を綴り、単語が文章を作りながら私の論文に直接関連のある全米の文献を画面に、流れるように紹介し始めた。私は驚きと興奮を押えながら、出てくる文献の一つ一つを丹念に読み始めた。5分ぐらい時間が経過したであろうか、画面にyuji yonemoriと名前が表われ、オハイオ州立大学に提出した彼の学位論文が紹介された。私は喜びのあまり、こおどりした。その瞬間、彼の名前の一字、一字がだんだん大きく見えて、画面いっぱいに広がってくるような錯覚におそわれた。外国で、全く予期していなかった米盛先生とのコンピューターの画面を通しての無言の再会は私に論文完成への強い意欲と決意を奮起させるのに十分な励ましとなった。今でも当時の感激を思い出して米盛先生に感謝している。勿論、コンピューターはこの一瞬の出来事をなに知らぬ顔して止まることなく、機械的に画面に文献を流し続けていた。それから数分後、コンピューターは止まった。時計を見ると13分が経過していた。床にたれ下がったタイプで打ち出された帯状の文献リストのコンピューター用紙を拾い上げ、ちぎり取り、再度注意深く読み返し、一次・二次資料に分類し、必要な文献の要約資料の発注手続きを終えてコンピューター室を出た。

米国にて、ERICが提供してくれた情報のすべてをもし自分で収集していたら、何年かかっていただろう。想像するだけでも気が遠くなる。また、学位論文を書いていたあの最も苦しい段階で米盛先生の無言の励ましがなかったら、私は学位取得にもっと長い時間がかかっていたかもしれない。ERICとの出会はずか13分間ではあったが、私の研究生活のなかで忘れることのできない最も貴重な体験の一つとして残っている。

琉大附属図書館にも日本科学技術情報センターのJICSTオンライン・システムが導入されている。自然科学系の教官各位はこのシステムを意欲的に活用されていることだろう。近い将来、学術研究の全分野の情報がトータル情報システムのなかに整備されることだと思う。また、我が国の図書館も全国図書館ネットワークのもとにオンライン・システム化の方向へ発展するに違いない。その時、図書館としての重要な役割は、今までの資料を整理しておいて利用者を待つという情報蓄積の機能から、積極的に情報を流す機能へと発展していくことは間違ない。楽しみにしている。 (短大部哲学教授)

五百万人目の入館者

法文学部史学科三年 岩倉公男君

琉大附属図書館では、開館以来正面入口で来館者数をチェックし記録しているが、奇しくも開館三十周年目を迎えた年に、五百万人目の入館者を記録した。

6月20日(金)、午後3時7分、岩倉公男君が五百万人目の入館者として図書館へ入館すると、関係者一同が拍手で迎え花束と記念品を贈呈した。

○岩倉公男君感想：

入口の方に、図書館の職員が多数おり、何かあるのかと思ったが、まさか自分が五百万人目の入館者とは思いませんでした。

五百万人目に入館して、皆さんから祝っていただいてうれしいです。これからも図書館を大いに利用したいと思います。



「沖繩研究史」書誌稿（1）

—— 総括篇 ——

新城安善

はじめに

本稿は、つぎに掲げるフレーム・ワークにもとずいて構成されている。

- ① 戦前戦後を通じて「沖繩研究」（歴史・地理・民俗・民族・芸能・言語・文学などの研究領域）の実績に対して、総括的にとりあつかわれた論考及び座談会記事を書誌事項（論考などが発表された年月順に配列）にしたがってまとめたものである。
- ② 「総括的に」というのは、その動向（経過・現状）及び評価（課題・展望）などひろい視野から論述された論考をいう。
- ③ ある特定の研究者の学問的な軌跡を中心にした論考及び座談会記事などについては、「沖繩研究」の視点をふまえた論考であれば収録することにした。

このようなフレームをもつ論考及び座談会記事などは、蓄積された研究実績を対象にした動向及び評価であるから、沖繩研究を進展させた原動力としての一側面を担う重要なドキュメントである。個々の研究史は、限定された時点での動向であり評価であるから、これから研究を志向しようとする者にとって、好個の促進剂的な役割をもつ参考資料になるであろう。

× × × ×

南島研究の現状（柳田国男）

〔第15回啓明会講演集〕（1925）→〔定本柳田国男集〕25巻（1964）筑摩書房刊→〔叢書わが沖繩〕1巻（1970）木耳社刊

伊波普猷先生の生涯とその琉球学（金城朝永）

〔民族学研究〕13巻1号（1948）→〔金城朝永全集〕下巻 民俗・歴史編（1974）沖繩タイムス社刊

米国に於ける沖繩研究（比嘉春潮）

〔沖繩文化〕2号（1948）→〔沖繩文化叢論〕（1970）沖繩文化協会編 法政大学出版局刊 →〔比嘉春潮全集〕4巻（1971）沖繩タイムス社刊

米国における沖繩研究（金城朝永）

〔民族学研究〕13巻4号（1949）→〔金城朝永全集〕下巻 民俗・歴史編（1974）沖繩タイムス社刊

沖繩研究の新段階とその意義（金城朝永）

〔東亜民族研究〕（1949）→〔金城朝永全集〕下巻 民俗・歴史編（1974）沖繩タイムス社刊

沖繩学への期待（仲原善忠）

〔沖繩文化〕6号（1949）→〔仲原善忠全集〕4巻（1978）沖繩タイムス社刊

沖繩文化研究の盲点—南島研究の新段階—（金城朝永）

〔文化沖繩〕4巻1号（1950）→〔金城朝永全集〕下巻 民俗・歴史編（1974）沖繩タイムス社刊

沖繩研究史—沖繩研究の人とその業績—（金城朝永）

〔民族学研究〕15巻2号（1950）→〔沖繩文化論叢〕1巻 歴史編（1972）新里恵二編 平凡社刊→〔金城朝永全集〕下巻 民俗・歴史編（1974）沖繩タイムス社刊

沖繩研究の成果と問題—巻頭のことば—（石田英一郎）

〔民族学研究〕15巻2号（1950）→〔石田英一郎全集〕8巻（1972）筑摩書房刊

最近の沖繩研究の傾向と情勢—琉球研究史の一節—（金城朝永）

〔おきなわ〕 26号(1953) → 〔金城朝永全集〕 下巻 民俗・歴史編(1974) 沖縄タイムス社刊

南島研究の目途—談話筆記—(柳田国男)

〔日本民俗学〕 1号(1953) → 〔沖縄文化論叢〕 3巻 民俗編Ⅱ(1971) 馬淵東一 小川 徹編 平凡社刊

伊波学を賛える—学問には絶えざる前進がある—(奥里将建)

〔琉球新報〕 1959年4月23日～25日

東京の「沖縄学界」—活躍する奇妙な人たち—

〔沖縄タイムス〕 1962年1月10日～

アメリカにおける沖縄研究(仲原善忠)

〔南と北〕 21号(1962) → 〔仲原善忠全集〕 4巻(1978) 沖縄タイムス社刊

ハワイ大学における琉球の研究

〔今日の琉球〕 7巻1号(1963)

ハワイの沖縄研究 東西文化センター文化交流の接点 比嘉春潮さんにきく—

〔沖縄タイムス〕 〔琉球新報〕 1963年4月26日

西欧学者の琉球研究(McCun, Shannon)

〔南と北〕 25号(1963) → 〔沖縄タイムス〕 1963年3月29日～4月2日

沖縄学をどうまなぶか—歴史・社会人類学・言語・文学研究の姿勢—

〔沖縄タイムス〕 1966年1月6日～20日

海外における沖縄研究(石川清治)

〔今日の琉球〕 10巻1号～7号(1966)

沖縄問題と研究の動向(石川清治)

〔沖縄タイムス〕 1966年2月15日～24日 → 〔沖縄文化〕 20号(1966)

沖縄研究の成果と展望—1966—(石川清治)

〔沖縄文化〕 23号(1967) → 〔沖縄タイムス〕 1967年5月31日～6月8日

沖縄学のあけぼの—沖縄学の展開・沖縄学の脱皮—(新里金福)

〔琉球新報〕 1967年1月1日～1968年9月21日 → 〔沖縄の百年〕 3巻 歴史編(1969) 太平出版社刊

東恩納文庫だより(嘉手納宗徳)

〔沖縄タイムス〕 1969年4月5日～9日

座談会 ヨーゼフ・クライナー氏と語る—沖縄研究の当面する課題をめぐって—(小川 徹 竹村卓二 比嘉政夫 外間守善司会)

〔沖縄文化〕 32号(1970)

「沖縄学」への一私見(喜友名嗣正)

〔琉球新報〕 1970年11月18日

沖縄学の伝統と展望(新里恵二)

〔文化評論〕 110号(1970)

伊波普猷を学ぶ視点(仲地哲夫)

〔沖縄タイムス〕 1970年9月8日～10日 → 〔近代沖縄の歴史と民衆〕 (1970) (1977) 沖縄歴史研究会編

辺境の神話学—柳田学と折口学—(谷川健一)

〔辺境〕 2号(1970)

沖縄学

〔沖縄タイムス〕 1971年11月16日～19日 〔琉球新報〕 1971年11月17日～24日

八重山研究史(宮良高弘)

〔沖繩文化〕 36・37合併号(1971) → 〔八重山の社会と文化〕 (1973) 宮良高弘編 木耳社刊
沖繩研究の流れと現状(外間守善)
〔季刊科学と思想〕 1号(1971) → 〔うりずんの島〕 (1971) 外間守善著 沖繩タイムス社刊
沖繩学の展開のために(谷川健一)
〔叢書わが沖繩〕 5巻(1972) 木耳社刊
沖繩研究における歴史認識「比嘉春潮全集」にふれてー(比屋根照夫)
〔文学〕 40巻4号(1972)
座談会 沖繩学の今日的課題(永積安明 外間守善 大江健三郎)
〔文学〕 40巻4号(1972)
座談会 柳田学と現代(神島二郎 益田勝実 川村二郎)
〔沖繩タイムス〕 1972年10月27日～29日
新しい沖繩学のために(鈴木武樹)
〔南島の古代文化〕 (1973) 国分直一 佐々木高明共編 毎日新聞社刊
シンポジウム「南島の古代文化」
〔南島の古代文化〕 (1973) 国分直一 佐々木高明共編 毎日新聞社刊
海外から見た沖繩研究ーヨーゼフ、クライナー教授の講演からー
〔琉球新報〕 1973年10月9日～10日 〔沖繩タイムス〕 1973年10月13日～14日
南島文化研究の今日的意義ー東京八重山文化研究会の発足によせてー(崎山 直)
〔八重山毎日新聞〕 1973年8月22日～23日
沖繩研究ー現状と課題ー
〔沖繩タイムス〕 1973年3月2日～7月18日
沖繩学の市民権とその近況(外間守善)
〔沖繩タイムス〕 1973年1月6日 → 〔新沖繩文学〕 25号(1974)
八重山文化研究とは何か(安積鋭二)
〔八重山文化〕 1号(1974)
沖繩学の沖繩歴史(宮城栄昌)
〔新沖繩文学〕 25号(1974)
沖繩学に思う(ヨーゼフ、クライナー)
〔守礼之邦沖繩〕 上巻(1974)
「沖繩学」の可能性ー「金城朝永全集」にふれつつー(新川 明)
〔文学〕 42巻8号(1974) → 〔沖繩文化〕 43号(1975)
沖繩研究の書誌とその背景(新城安善)
〔沖繩県史〕 6巻 文化2(1975)
「沖繩学」草創期の軌跡(宮良高弘)
〔日本読書新聞〕 1974年3月18日 → 〔沖繩文化〕 43号(1975)
伊波普猷生誕百年の年頭にーその南島文化のみかたをめぐってー(外間守善)
〔沖繩タイムス〕 1976年1月4日
レブンウォースと琉球研究(山口栄鉄)
〔沖繩タイムス〕 1976年1月9日～13日
伊波普猷と沖繩研究ー第三回伊波普猷賞贈呈式の記念講演からー(金城正篤)
〔沖繩タイムス〕 1976年1月31日～2月3日

- シンポジウム「沖縄学と現代」－伊波普猷生誕百年記念 プログラム・報告要旨（沖縄タイムス社）（1976）
「沖縄学」と現代－伊波普猷生誕百年記念シンポジウム－（特集記事）
〔沖縄タイムス〕 1976年3月6日～4月1日
- 郷土研究にかかわって－東京八重山研究会の三年－（崎山 直）
〔琉球新報〕 1976年5月13日～14日
- 沖縄研究の意義（ヨーゼフ、クライナー）
〔伊波普猷全集月報〕 11号（1976）
- 琉球学の視点と方法－自己認識の学として－（小島瓊禮）
〔琉球新報〕 1976年5月13日～21日
- 沖縄学の潮流と展開－伊波普猷生誕百年－
〔琉球新報〕 1976年3月24日～5月11日
- 「沖縄学」の意味（牧瀬恒二）
〔歴史評論〕 313号（1976）
- 沖縄学の黎明（伊波普猷生誕百年記念会編）東京沖縄文化協会（1976）
ヤポネシア論の展開
〔沖縄タイムス〕 1977年4月12日
- 欧米に於ける沖縄研究の動向（友寄英一郎）
〔琉球大学法文学部紀要〕 史学・地理学編 20号（1977）
- 沖縄と近代
〔沖縄タイムス〕 1977年4月12日～5月24日
- 「沖縄学の黎明」と伊波普猷生誕百年（池宮正治）
〔文学〕 45巻1号（1977）
- ことしの回顧（県内） 学術（沖縄研究）（高良倉吉）
〔沖縄タイムス〕 1978年12月22日
- 盛んな沖縄研究－現地の活動を中心に－（外間守善）
〔朝日新聞〕 1978年5月18日
- 社説 わが「沖縄学」のすすめ
〔沖縄タイムス〕 1978年10月5日
- 沖縄学の発展とその課題（外間守善）
〔法政〕 5巻10号（1978）
- 折口信夫の方法と琉球学（小島瓊禮）
〔日本民俗学〕 123号（1979）
- 沖縄研究－この一年－（仲地哲夫）
〔沖縄タイムス〕 1979年12月27日
- 座談会 沖縄研究の課題と展望（池宮正治 高良倉吉 仲地哲夫 比嘉政夫 田名真之 我部政男）
〔沖縄タイムス〕 1979年1月1日～12日

次回は＜考古学・歴史篇＞を掲載します。

（整理係長）

知的大学生なら是非一読を

“わたしの知的生産の技術 正・続編”

「知的生産の技術」研究会編 講談社

1978～79 正編 890円、続編 980円

「知的生産の…」、「知的生活の…」、「知的…」という出版物は最近よくみられることだが「知的生産」という言葉を流行らせたのは昭和40年に岩波書店の書評誌である「図書」に発表された「知的生産の技術について」の著者梅棹忠夫氏が最初のことである。

この本はこの「知的生産の技術について」に触発されてつくられた「知研」即ち「知的生産の技術」研究会の代表者八木哲郎氏等が研究会をもつなかからとりだしたエッセンスを本にしたものである。

登場人物は実に多彩で、それぞれが自分の知的研究活動を多種多様な方法で述べている。

ちなみに末尾の執筆者紹介からみると、正編には理学博士で文化人類学者の梅棹忠夫、書誌評論家紀田順一郎、社会科学者の加藤秀俊、評論家で作家の小中陽太郎、歴史家で評論家の羽仁五郎、青地農、雑誌編集長の飯塚昭男、英文学者の外山滋比古、渡部昇一、地球物理、惑星物理学の権威竹内均、学生時代から天才のアダ名をもらったというインターディシプリナリーを語れるといわれる小室直樹、国際報道カメラマンの岡村昭彦、音楽評論家の蘆原英了、ディベート道場を開いている松本道弘、企業教育コンサルタントの岩崎隆治等であり、また続編では視野の広い学風を展開することで知られる今西錦司、また梅棹忠夫、渡部昇一、加藤秀俊、岡村昭彦等（前出）、ユニークな日本経済論を展開する竹内宏、故大宅壮一門下のジャーナリストで社会評論家の大隈秀夫、同じく大宅マスコミ塾に学び現在「週刊読書人」の副編集長の植田康夫、筑波大学社会学系助教の加藤栄一、詩人で明大教授の大岡信、早大教授の西川潤、経済問題について解説、評論活動を行なっている堺屋太一、ミリオン・パール賞ほか多数の賞をもらい「サンダカン八番娼館」や、「忍ぶ川」で有名な映画監督の熊井啓、自営業で「知研」代表の八木哲郎等実に色々な分野の人達の知的生産活動が述べられている。

この本の柱は、①何（資料）をどのように探すか、②あつめた資料を整理してどのように論文を作成するか、また③長い人生のうちで何がほんもので何がにせものかをみきわめる鑑識眼をやしなうことができる、等でつらぬかれている。

80年代になって情報の供給過剰がますます顕著になってきている反面、必要な情報は供給不足といわれており、「学校はものごとを教えすぎるが、知識の獲得のしかたはあまり教えてくれない」（正編P.12）にあるように我国の大学は知識のつめこみはやるがその知識の探し方については殆ど行なわれていないのが実状である。この時にあたり知的探索活動を行なうには情報のネットワークを駆使することが他人に先んずることになる。

論文の書き方についての本は最近でこそ大部見うけられるようになり、学生には大変便利になったが将来ジャーナリストを志す人にはまたとない読みものでもある。

価値観の多様化、社会が分列、不安定になりそうぞうしくなるとものごとの判断がむずかしく、進路の選択が容易ではない。いわゆる有名人といわれる人達は遅くとも高校時代までには進むべき人生のプロセスを決めていることだが私ども殆ど人は大学に入学してから決めかねているのが実状である。

このように社会へのパスポートとしての大学入学をしてきたものにとってこの2冊は大変参考になる道しるべではないだろうか。正統それぞれ2冊ずつが既に購入されており是非一読を勧めたい図書である。なお付録として、正編の末尾に150冊の知的生産の技術に関するリストがある。（閲覧係長 新井裕丈）

新 着 図 書

| | | | |
|--|--------------|--|--------------|
| 学術研究者になるには 工藤昌男 丸山剛司共著 ぺりかん社 1978 | 002-Ku 17 | 倉書房 1977 | |
| 書誌索引論考 天野敬太郎 日外ア ソシエーツ 1979 | 014.3-A 43 | 経済学巡礼記 高橋泰蔵 東洋経済 新報社 1977 | 331-Ta 33 |
| 人と思想—和辻哲郎— 湯浅泰雄 三一書房 1973 | 121.9-Y 96 | マルクスの経済学 森嶋通夫 東洋 経済新報社 1979 | 331.34-Ma 64 |
| 上古より漢代に至る性命観の展開 森三樹三郎 創文社 1976 | 122-Mo 45 | ケインズ 人・学問・活動 ミロ・ ケインズ編 佐伯彰一、早坂忠訳 東洋経済新報社 1978 | 331.39-Ke 67 |
| かたくして、やわらかい頭 森政弘 実業之日本社 1978 | 159-Mo 45 | 理論経済学の本質と主要内容 シュ ムペーター著 木村健康、安井琢 磨共訳 日本評論社 1943 | 331.391-Sc 8 |
| 歴史における科学とは何か バーリ ンほか著 内山秀夫編訳 三一書 房 1978 | 201-B 38 | インドネシア 経済と投資環境 室 谷文司編 アジア経済研究所 1978 | 332.24-Mu 77 |
| 民衆史の課題と方向 民衆史研究会 編著 三一書房 1978 | 210.04-Mi 47 | ソヴェト経済政策史 市場と営業 奥田央 東京大学出版会 1979 | 333.138-O 54 |
| 隠れた日本人 山田宗睦 三一書房 1976 | 210.1-Y 19 | おんな・部落・沖縄 もろさわよう こ 未来社 1974 | 367.21-Mo 77 |
| わが青春 五所平之助 永田書房 1978 | 289.1-G 69 | 教育とは何か 勝田守一 岩波書店 1975 | 370.4-Ka 87 |
| 吉野作造—日本的デモクラシーの使 徒— 田中惣五郎 三一書房 1971 | 289.1-Ta 84 | 教育は死なず—どこまでも子どもを 信じて— 若林繁太 労働旬報社 1979 | 370.4-W 17 |
| 近代日本を考える 有沢広己 王野井 芳郎共編 東洋経済新報社 1973 | 302.1-A 76 | ひとり学びの上手な子に 亀田佳子 あすなろ社 1978 | 376.1-Ka 33 |
| エコロジー 生き残るための生態学 サミュエル著、辻由美訳 東京図 書 1974 | 304-Sa 59 | 現代文化人類学 石川栄吉編 弘文 堂 1978 | 389-I 76 |
| 日本の黒幕 森川哲郎 三一書房 1977 | 312.1-Mo 51 | アメリカ・インディアン その文化 と歴史 ウィルコム・E、ウォシ ュバーン著 富田虎男訳 南雲堂 1977 | 389.53-W 42 |
| 婦人の法的地位 日本法社会学会編 有斐閣 1977 | 313.19-N 77 | 教養の数学 大関信雄ほか共著 培 風館 1978 | 410-O 98 |
| 日本人への遺書 岡本愛彦 未来社 1978 | 319.121-O 42 | 現代数学のトピックス スタントン フライアー共編 矢野健太郎訳 日本評論社 1979 | 410-St 2 |
| ベトナム以後のアジアと中ソ 1975 —77 浜勝彦編 アジア経済研究 所 1978 | 319.2-H 22 | 場の古典論 リフシッツ著 恒藤敏 彦 広重徹訳 東京図書 1978 | 421.36-L 22 |
| 法学入門 五十嵐清 一粒社 1979 | 321-I 23 | 生命科学 中村桂子 講談社 1978 | 460-N 37 |
| スイスの夫婦財産法 松倉耕作 千 | 324.94-Ma 79 | | |

| | | | |
|--|-------------|-------------------------------------|------------|
| 人間はどこから来たのか? マクドナルド著 卷正平訳 グラフィック社 1978 | 466.1—Mc 44 | いただきます 岩田宏 草思社 1978 | 914.6—I97 |
| 本能の研究 ティンバーゲン著 永野為武訳 三共出版 1975 | 481.78—Ti 5 | いまもむかしも愛別ばなし 水上勉 文化出版局 1977 | 914.6—Mi36 |
| 工学と技術の課題 その目指すところ 工学論研究会編 理工図書 1978 | 502—Ko24 | 鳥のように獣のように 中上健次 北洋社 1976 | 914.6—N32 |
| 日照関係図表の見方・使い方 伊藤克三 オーム社書店 1976 | 525.1—I89 | 詩人のノート 田村隆一 朝日新聞社 1976 | 914.6—Ta82 |
| じょうずに話せる女性の結婚スピーチ集 加賀美幸子 新星出版社 1978 | 809.4—Ka 16 | 六朝詩の研究—集団の文学と個人の文学— 森野繁夫 第一学習社 1976 | 921.4—Mo59 |
| 英語演説 松本亨 英友社 1966 | 809.4—Ma81 | 中国戯曲演劇研究 岩城秀夫 創文社 1973 | 922.5—I 93 |
| 私の文章作法 岡田喜秋 ぎょうせい 1978 | 816—O 38 | 中国近世における短篇白話小説の研究 小野四平 評論社 | 923—O67 |
| 国語英語の即答演習 研究社 1978 | 837.8—W68 | 冒頭的一句または小説の誕生 アラゴン著 渡辺広士訳 新潮社 1975 | 950—A62 |
| ドイツ語手紙の書き方 竹内萬兵衛 三修社 1978 | 846—Ta67 | 失われた時を求めて プルースト著 淀野隆三他訳 新潮社 1974 | 953—P 94 |
| ドイツ会話40章 石川光庸、石川サスキア共著 白水社 1978 | 847—I 76 | 盲いたるオリオン シモン著 平岡篤頼訳 新潮社 1976 | 953—Si 5 |
| 初級クラスのドイツ語 石渡均ほか著 郁文堂 1978 | 845—I82 | 発見 E、イヨネスコ著 大久保輝臣訳 新潮社 1976 | 954—I 61 |
| 我を求めて 作家論集 勝又浩 講談社 1978 | 910.26—Ka88 | 悪魔払い クレジオ著 高山鉄男訳 新潮社 1975 | 954—L 46 |
| 手さぐり日本 「手の思索」 秦恒平 玉川大学出版部 1975 | 914.6—H 41 | 想像力の散歩 プレヴェール著 粟津則雄訳 新潮社 1977 | 954—P92 |

＝ 図書館事情

<第128回図書館運営委員会要録>

日時：昭和55年4月18日（金） 13：10～15：00

場所：会議室（プレハブ2階）

審議事項：

- (1) 前期定例日について
- (2) 経済学、商学関係専門図書及び学術雑誌の充実整備計画について
- (3) 図書資料（大型コレクション—人文社会科学系）の選択及び文部省への提出について

報告事項：

- (1) 「沖縄関係資料目録」の発行について
- (2) 理学部図書室の開設について

<出張> 5月6日（火）—9日第10回九州地区国立大学図書館協議会総会（於ひびき荘）及び第31

回九州地区大学図書館協議会総会（於北九州会館）へ幸地成憲館長、平良恵仁事務長出席。

<来訪者> 5月24日（土）～27日

日米友好委員会及びアジア財団を代表して、国立国会図書館調査局次長のジョン・C・ブローデリック夫妻（Dr. John C. Broderick）が来島し、ブローデリック氏は5月26日（月）、附属図書館の会議室に於て10時から11時まで、アメリカ研究の教官及び館長、事務長、係長等と懇談会をもち、更に日米友好基金によるアメリカ研究図書コレクションを視察した。

<出張> 5月29日（木）～31日昭和55年度国立大学附属図書館事務（部・課）長会議（於国立科学博物館講堂）へ平良恵仁事務長出席

<出張> 6月17日（火）～21日第27回国立大学図書館協議会総会（於東北大学）へ幸地成憲館長、平良恵仁事務長出席

<第129回図書館運営委員会要録>

日時：昭和55年6月16日（月） 13:10～14:40

場所：会議室（プレハブ二階）

審議事項：

- (1) 昭和55年度本館備え付け図書、学生用図書費の配分について
- (2) 昭和55年度の購入雑誌費の移算額について
- (3) 昭和56年度購入雑誌の選定について

報告事項：

- (1) 昭和54年度図書費の決算について
- (2) 琉球大学とBクラス大学との比較
- (3) 文部省図書館関係予算
- (4) 新館落札者について—建築設計：伊藤喜三郎設計研究事務所 設備設計：岡崎設備設計事務所

<その他>

8月22日（金）昭和55年度全学共同レクリエーション「ソフト・ボール大会」に於いて、附属図書館Bチームが優勝し、宮城学長より優勝杯と賞状が手渡された。

琉球大学附属図書館報 “びぶりお” 第13巻 第2号〔通巻第47号〕
昭和55年9月10日 発行人 平良恵仁 沖縄県那覇市当蔵町3丁目1番地
電話 87-0101（内線338）